

# 資料委員会 便り

## ARCHIVES NEWS

第 6 号

(2019年 6月)

保存資料の整理作業は続けられています。毎週水曜日、数名の資料委員が参加しての資料の分別、保存袋へ封入、目録記入、画像取込み等、こうした作業は当分続きます。



昭和3年から15年にかけて記録された「川越基督教会 財産目録」がありますがその後の記録が未記入になってます。宣教140周年にあたる昨年、この続きを調べることになりました。乾寿夫兄がこの労をとっていただき、1年間をかけて、調べていただきました。その様子を書いていただきました。

資料委員の玉木純子姉は「山邊久吉師の日記」を解読しています。山邊師は1887(明治20)年～1888年に川越基督教会で伝道師をしていました。この日記の所蔵者は資料委員の本間始さんで、山邊師は父方の祖父にあたり、ウィリアムズ主教の信頼厚く、晩年は関西方面で活躍されました。人生半ばにロンドンで海員宣教に従事、日記はそのロンドン～横浜間の旅の1ヶ月間の記録です。当時の船旅の様子や英国文明や通りすがりの聖地に対する思いがたつづられています。A4版の半分程、赤い布張りの表紙でルートの地図や案内も掲載されています。本間兄とご親族の方々が大切に受け継いで来られた資料です。資料委員会ではこのような元々教会で所蔵していたのではない資料も取扱わせていただいています。また山邊師の妻キサ夫人は長崎の蘭医で嬉野鼎甫(うれしのていじゅ)氏の娘、嬉野氏はウィリアムズ主教の日本語教師。2人を撮影したガラス乾板は現在立教学院資料センターに保管されています。

教会創立者の田井正一師は川越着任早々、私立女学校を創立されました。この学校も10余年の短い事業でしたが、創立期から廃校までに公立学校との間に教師、生徒の交流があったようです。県立川越女子高校の野口孝教諭は永年、川女の歴史をお調べになっており、今回聖公会の私立女学校との関係を集めた「川女歴史探報」が発行されました。お読みください。

# 川越基督教会財産目録は 教会の歴史がかいま見える

パウロ 乾 寿夫

教会保管の古文書のなかに「財産目録 川越基督教会・川越初雁幼稚園(昭和3年現在)」と言う資料がある。これは恐らく筆跡からして、昭和15年頃に奥村亮司祭と山本藤輔氏(山本喜一さん、若宮光子さんのご尊父)が書き上げたものではないかと思われる。財産目録とあり、教会と初雁幼稚園の土地・建物の坪数、取得年月、価額、取得経過が事細かに書かれている。そして聖堂什器備品の十字架、説教壇、オルガン、燭台、フロンタル、チャリス・パテンの類まで記載されている。さらにまた、明治時代の川越宣教開始当時の説教講演会の年月日、説教者、聴衆者人数、開会のいきさつ等々、詳細に記録されている。この資料一冊で、まさに明治大正から昭和15年頃までの教会と初雁幼稚園の歴史を見ることが出来る。

ところがさて、戦後の昭和20年以降は教会財産の取得品目や取得年月、その財産が寄贈なのか購入なのか、寄贈ならばどなたからから頂いたものなのか、記録が全くと云っていないほどない。「教会が保管している什器備品、信徒から寄贈奉献された財産を記録した財産目録を作成しておくべきではないか」との教会資料保管委員長の山本元さんの要望もあり、調査を始めてみた。調査は受聖餐者(堅信受領者)総会議案・報告書、教会会計帳簿、領収書、教会委員会記録、月報(蔦の教会)を対象にした。近年は記録もしっかりと記載され、関係者の記憶もハッキリしていて、かなり正確に判明したが、昭和20年代~40年代(1945~74年)は記録がないか、あっても詳細が分からない。確実に判明したものだけを記載することとした。

このたび作成した教会財産目録に、ぜひ目を通して一読していただきたい。教会財政はすべて献金で支えられているのは勿論ですが、教会財産はいかに信徒の篤い思いが込められているかが感じられる。そのときそのときの教会が望んでいることに、信徒が喜んで寄贈奉献に応じ、神様の恵みに感謝して捧げる。その思いを感じ取ることが出来る。

この目録は調査不足でかなりの欠落があると思う。また記載があっても誤りがあると思う。その節は指摘して頂き、訂正したい。

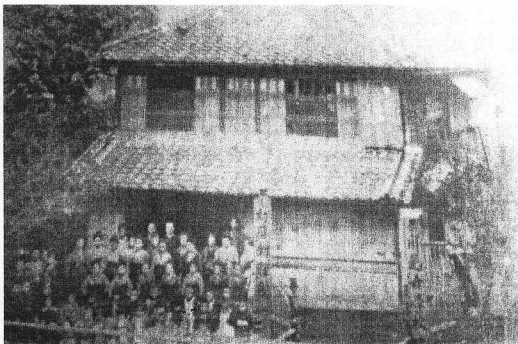
# 川女歴史探報

第18号

発行所  
六軒堂  
野口 孝

## 町立川越高等女学校に先がけ

# 私立川越女学校があった



設立当初1903年の初雁幼稚園と川越女学校。現在の宮下町1丁目にあったという。それぞれの看板が見え、幼稚園の看板の脇に、女学生や子どもらが整列している。

設立当初1903年の初雁幼稚園と川越女学校。現在の宮下町1丁目にあったという。それぞれの看板が見え、幼稚園の看板の脇に、女学生や子どもらが整列している。

校長は司祭  
講師は川越中学校教員も

本校はこの弊風を矯め徳技兼備の婦女を養成せんが為に設立したとある。課程には2つのコースがあり、普通教育を施す「本科」は高等小学校修了以上の学力を必要とし、修業年限3年で高等女学校卒業と同一の学力を身に付ける、とした。教授科目は、倫理、国語、漢文、数学、歴史、地理、理化学、家事、裁縫、音楽、体操、外国語(随意)、そして課外として茶の湯、生花、箏曲があった。

「設立賛助者」として48名の名が掲載されている。その中でどんな人物かが分かる人を挙げていく。岩沢虎吉(川越町助役)、星野仙蔵(福岡河岸の回漕問屋で後に東上線を誘致)、岡田秋葉(既述)、太田元章(川越町助役)、神木三郎兵衛(大井村村長)、高山仁兵衛(川越の太物商御問屋)、竹谷兼吉(川越の米穀、両替商。川越女学校の建築資金を提供した)、中井尚珍(川越町2代目町長)、野々山喜右衛門(川越電気鉄道経営)、山崎嘉七(和菓子商。亀屋)、船津山喜(仙波村会議員)、小山文蔵(川越の煙草商)、綾部利右衛門(川越の油商、運送業も営み、後に川越市初代市長に就任)、綾部惣兵衛(川越の菓商、町議会議員で、後に衆議院議員)、喜多欽一郎(川越商業会議所役員で川越町学務委員)、菅野政五郎(川越高等小学校校長)等々。

町立川越高等女学校の1回生の中には、私立川越女学校の入学申請書にも名前がある生徒が3名確認されている。喜多春江、船津千代、綾部伊豫という生徒で、父親はそれぞれ喜多欽一郎、船津山喜、綾部利右衛門で、いずれも川越女学校の賛助者に名を連ねた有力者である。彼らが町立高等女学校の設立申請に関わった事は想像に難くない。一九〇六年に町立川越高等女学校が設立されると、〇八年に私立川越女学校は「川越裁縫女学校」と改称したが生徒数は激減し、一〇年に廃校となる。まさに役目を終えたのである。

キリスト教会が経営  
普通教育の女学校を目指す

女学校を創設したキリスト教の教会は、聖公会川越キリスト教会。松江町にある。亀屋のある仲町交差点を東に行き、その突き当たりにある蕨のからまる煉瓦作りの教会で、国の登録文化財になっている。

女学校創設の中心となったのが田井正一という司祭である。田井は一八七八(明治11)年に川越での伝道を始め、九八年に川越教会の主任司祭となり、一九〇一年には川越に定住した。キリスト教の布教のかたわら田井が重視したのが女子教育と幼児教育で、川越に定住した年に、香蘭館という女子教育機関と宇気良幼稚園(〇五年)

女学校を創設したキリスト教の教会は、聖公会川越キリスト教会。松江町にある。亀屋のある仲町交差点を東に行き、その突き当たりにある蕨のからまる煉瓦作りの教会で、国の登録文化財になっている。

女学校を創設したキリスト教の教会は、聖公会川越キリスト教会。松江町にある。亀屋のある仲町交差点を東に行き、その突き当たりにある蕨のからまる煉瓦作りの教会で、国の登録文化財になっている。

町立川越高等女学校に先行する形で、キリスト教の教会関係者が創設して普通教育を施した女学校が川越にあった。さらに創立当初の町立川越高等女の職員にキリスト教教会の女性宣教師がいた。このことはすでに20年以上前に本校の英語教諭だった故奥雅臣氏が論究しているが、今回は日本聖公会川越基督教會資料保管委員会委員長の山本元氏、同委員会委員で東京国際大学名誉教授のペーリ・トゥエル氏の協力をいただいた。数々の資料をもとに具体的に紹介したい。

町立川越高等女学校に先行する形で、キリスト教の教会関係者が創設して普通教育を施した女学校が川越にあった。さらに創立当初の町立川越高等女の職員にキリスト教教会の女性宣教師がいた。このことはすでに20年以上前に本校の英語教諭だった故奥雅臣氏が論究しているが、今回は日本聖公会川越基督教會資料保管委員会委員長の山本元氏、同委員会委員で東京国際大学名誉教授のペーリ・トゥエル氏の協力をいただいた。数々の資料をもとに具体的に紹介したい。

町立川越高等女学校に先行する形で、キリスト教の教会関係者が創設して普通教育を施した女学校が川越にあった。さらに創立当初の町立川越高等女の職員にキリスト教教会の女性宣教師がいた。このことはすでに20年以上前に本校の英語教諭だった故奥雅臣氏が論究しているが、今回は日本聖公会川越基督教會資料保管委員会委員長の山本元氏、同委員会委員で東京国際大学名誉教授のペーリ・トゥエル氏の協力をいただいた。数々の資料をもとに具体的に紹介したい。

町立川越高等女学校に先行する形で、キリスト教の教会関係者が創設して普通教育を施した女学校が川越にあった。さらに創立当初の町立川越高等女の職員にキリスト教教会の女性宣教師がいた。このことはすでに20年以上前に本校の英語教諭だった故奥雅臣氏が論究しているが、今回は日本聖公会川越基督教會資料保管委員会委員長の山本元氏、同委員会委員で東京国際大学名誉教授のペーリ・トゥエル氏の協力をいただいた。数々の資料をもとに具体的に紹介したい。

町立川越高等女学校に先行する形で、キリスト教の教会関係者が創設して普通教育を施した女学校が川越にあった。さらに創立当初の町立川越高等女の職員にキリスト教教会の女性宣教師がいた。このことはすでに20年以上前に本校の英語教諭だった故奥雅臣氏が論究しているが、今回は日本聖公会川越基督教會資料保管委員会委員長の山本元氏、同委員会委員で東京国際大学名誉教授のペーリ・トゥエル氏の協力をいただいた。数々の資料をもとに具体的に紹介したい。

# 聖公会川越キリスト教会の 人びととその活動



1907年撮影の宣教師と川越教会の人びと。後列右から二人目が司祭にして川越女学校校長の田井正一。その左が駒野義夫。前列右端がミス・ランソン。一人おいて白いブラウスの女性がミス・ヘーウッド。

聖公会川越キリスト教会の宣教師の中に、町立川越高等女学校で講師を務めたと考えられる女性宣教師の活動を通じて、明治時代の日本社会で果たしたキリスト教の役割の一端を紹介したい。

## 町立川越高等女学校 宣教師の名

女性宣教師の名前はミス・ヘーウッド。川女の『同窓会名簿』の旧職員欄の町立時代の職員一人として記され、その脇には「聖公会」とある。在職期間は空欄だが、ミス・ヘーウッドはこの教会の女性宣教師だった。

川越での聖公会の活動は、一面に記したように、田井正一司祭によって本格的に始まる。キリスト教布教が認められていたとはいえず、日本国内の多くの地域では、キリスト教への警戒感はまだまだ強かった。川越もそのような地域の一つで、布教から9年後の87年には、最初に洗礼者として名が現れた。89年の川越で

### 旧職員

氏名	教科	在職年
中井尚珍	高等小義務	明39. 4~
菅野政五郎	高等小義務	明39. 6~
山取秋夫	小原流作法	明39. 6~
星野正義	校医	明39. 6~
田中ヘーウッド	聖公会	明39. 5~
廣瀬彌吉	町立校長	明40. 4~
倉田村史		明42. 3~
河村仁兵衛		明42. 4~
久田根		明42. 4~
岡小千		明42. 4~

川女の『同窓会名簿』に記された町立時代の旧職員

たのか、確かな証拠はないが、一九〇六年から川越にいたわづかの期間、何らかの形で英語教育にあたったのではないだろうか。写真で見ると、日本女性よ

りも大柄で細面である。肌も腫の色も違う。洋装のアメリカ人女性から間近に英語の教授を受けた当時の生徒は、どんな思いで授業を受けていたのだろうか。

また、川越での子供たちも、多数的に学生帽をかぶっている者もいるので、中学生を写したものである。川越の中学生については記した文に「上級の男子はイートンな衣服を着ている。下級生は短いスカートが半分に分かれたような着物を着ている」とあるから、ここに写っているのは中学一、二年生であろう。

さらにヘーウッド、ランソンは、一九〇五年から自宅で日曜日の午後、子どもを対象とした「日曜学校」というものを開いた。キリストにまつわる物語を聞かせ、絵、カード、そして聖歌を通じてキリスト教について教えるのである。クリスマス会も行われた。最初は19名で始まった日曜学校も、やがて毎回の参加者の平均は40名にもなり、一九

まず彼女たちがやってきた一九〇四年、日本はロシアとの戦争中だった。そのころもあって、住民からはロシア人スパイという疑いの目で見られていたのではないかと感じたという。教会での講話には関心をもちて来たり、聖書を熱心に読む者もいたが、いざ洗礼となると親や夫の反対でできなかったという者が多かった。一方

訪問すると、既婚女性の警戒心の強さも感じた。そこで直接の布教ではなく、方法で住民の中に入っていった。その一つが婦人対象の編み物教室

クリスマス会に二百人。室である。毎週好評のうちに行列、彼女たちは信者ではないが、編み物教室の終わりにみんな聖歌を歌った。また中学生対象の英語教室も開いた。これが先に記した英語研究会のことであろう。「中学生」だから、川越中学校の生徒も多数いたであろう。右の写

〇七年には登録者数が90名となった。さらに南大塚の教会では月曜学校、入間川で火曜学校を開いた。一九〇六年12月のクリスマス会には公に知らせたこともあり、二百人の子どもたちが集まった。教会では収容できない数なので、大きなホールを借りたという。「主われを愛す」という聖歌が始まり、田井司祭による祈り、主の祈りが子どもたちと共に唱えられ、歌、お話、聖書の言葉の交流、聖歌があり、ケーキを食べ、最後にプレゼントが配られた。子ども達は大喜びだった。クリスマス会や日曜学校の内容は宗教活動そのものだが、日曜学校には親も内緒で参加していた子ども達も、クリスマス会後には親も了解したという。

ヘーウッドの川越での活動については、米国聖公会機関誌だった「The Spirit of Missions」に、ヘーウッド自身が記した文章がある。そこには川越での布教の困難と共に、珍しく感じたこと、次第に信者を増やして行く様子なども記されている。

〇七年には登録者数が90名となった。さらに南大塚の教会では月曜学校、入間川で火曜学校を開いた。一九〇六年12月のクリスマス会には公に知らせたこともあり、二百人の子どもたちが集まった。教会では収容できない数なので、大きなホールを借りたという。「主われを愛す」という聖歌が始まり、田井司祭による祈り、主の祈りが子どもたちと共に唱えられ、歌、お話、聖書の言葉の交流、聖歌があり、ケーキを食べ、最後にプレゼントが配られた。子ども達は大喜びだった。クリスマス会や日曜学校の内容は宗教活動そのものだが、日曜学校には親も内緒で参加していた子ども達も、クリスマス会後には親も了解したという。



1906年撮影。中学生と思われる子どもたち。(米国聖公会「The Spirit of Missions」より)

の有志共催で、川越会館(旧川越市民会館の前身)で行われた。当日の出席者は約百名。町助役の開会挨拶で始まり、教会関係者の他に代議士綾部惣兵衛も送別の辞を送った。二人の活動が布教を超えて、地域に浸透していたことが伺われる。

後任者 二人の後任には、アプタンとマータンという女性宣教師が赴任した。彼女たちの活動も地域に貢献するところが大きかった。特に一九一〇年8月の荒川大洪水での活動はめざましいものがあった。この時川越町でも多くの家屋が浸水、流失の被害に遭った。両女史は荒川沿いの農家の蚕室を借りて託児所を開き、罹災者の子どもを預かった。また初雁幼稚園が夏休み中だったので、保母全員が保育と救済活動にあたった。

川越に限らず、明治期日本の教育や救済事業の中でキリスト教徒の果たした役割は大きい。